

## 食えぬ話

《一世紀の胃袋は養えるか》

一九九三年の冷夏で日本のコメの生産量は平成の大凶作となって、戦後の最低ラインの八百万トンを割り込むほど落ち込み、暴騰した内地米を賣うのにオイルショック以来の買物行列ができた。外国産米の緊急輸入が始まりコメの国際価格を釣りあげ平成米騒動の様相を呈していた。二転してこの二年は猛暑による大豊作が続いて今度は米余りで以前の反動での値下がりが見えた。天候の激変による需給バランスの崩れでしばしば価格が大きく変動する。オイルショックの時もエルニニョが日本の台所を直撃し、豆腐の値段が二倍に高騰させてインフレを加速させた。

エルニニョが起ると世界三大漁場の一つであるペル沖に海水温に異変が起る。寒流への湧昇流のなかで育つ豊富なプランクトンが姿を消し、アンチヨビというカタクチイワシの漁獲が激減する。それを動物性の蛋白質として使っている飼料が極端に不足する。ついには大豆や大豆の搾りかすに需要が集中して値段が上がる。その結果、輸入に頼りきっている日本で値段が上がり、風が吹けば桶屋が儲かる」方式でエルニニョが起ると豆腐の値段が二倍となってしまう。

この年は旧ソ連の不作で小麦相場が二、三倍に値上がりし、米国が主要農産物の輸出を一時ストップさせて食糧安保に二石を投じた年でもあった。八十年は日本でも大冷夏となり、世界的な異常気象となって食料危機が叫ばれた最初の年となった。

翌八一年から八二年にかけてのエルニニョの時にはアフリカの干魃と飢饉が進み、病んだ地球上で四分の一が飢饉に苦しんで二世紀を迎えようとしている。

二世紀を待たず最近の国際的な穀物相場と在庫に黄から赤信号のシグナルが点滅しだした。穀物の相場はジリジリ上昇しだし、世界的な食料危機が最初に叫ばれた八〇年以來の二六年ぶりの高値となってきた。高度成長目覚ましい中国や東南アジアの国々の肉類の需要の拡大と、世界のパンかこ「米国の不作によるもので、トウモロコシの在庫が大恐慌以來の干ばつといわれた年の最低水準にまで落ち込み、小麦や大豆など主要穀物の在庫が軒並み危機ラインに近づいている。もし八〇年並みの異常気象に見舞われたら再び世界規模の危機の到来となりうるレベルとなっている。

そこで気になるのが環境保護団体ワールドウォッチのレスター・グラウン氏によるレポート。二〇二〇年には中国の穀物が三億トン前後不足する」と予測した。誰が中国の胃袋を養うのか」である。あら筋は以下の通りである。世界人口の二割を占めている中国が毎年およそ二千万人のペースでさらに増え続ける。経済成長にともなう生活水準の向上で肉食が普及して、牛肉「キログラム」に生産するには七割のエサが必要となる家畜のエサの輸入が増大する。工業開発での農地の減少と公害の拡大、農業収入との格差による勤労意欲の減退。黄河中流域にオールドス高原があるが、かつてジンギスカンの時代にはここには森が広がっていたが、現在は老木が幽鬼のごとく一本立っているのみで地面の

侵食が著しく進んでいる。このような土壌の侵食や内陸での砂漠の拡大、酸性化、さらに温暖化による加速により耕作地の減少・等々である。

反論も多い。根拠となる数字の過大な見積りや筋書きが環境保護に偏り過ぎている。今後三〇年で穀物需要は倍増するがその供給は可能であり、いたずらに危機感を煽るべきでないとの意見も根強い。しかしながら世界で輸出に回わせる穀物が二億トン程度、日本のコメが一千万トンということを考えれば、中国の胃袋の圧力は過小には扱えない。その中国では九三年に戦後最悪の洪水被害に見舞われ、九四年も最悪といわれる干ばつとなり、ついには二世紀を待たずしてトウモロコシの輸出国から輸入国に転じてしまった。一方、日本は世界最大の食料輸入大国であり、米国からの輸入がむろん第一位であるが二位はすでに中国からとなり依存性が高まる。一方で問題の深刻さがあるがえる。

中国の胃袋の脅威」のシナリオの大前提には、経済の高度成長がこのまま順調に続いて外貨が手元に残って穀物の買い付けができるとことがある。それは、飽食になれた日本の胃袋を誰が養うか」と同じ次元の話である。飢饉に悩む発展途上国のほとんどが外貨不足、債務国で輸入がままならぬ現実を考えれば、穀物価格の高騰で当然。パイが細って飢饉が進むことになる。宇宙に浮かぶ青い地球には、酸性雨で枯れた森や湾岸戦争で炎上した油田の黒いシミ、熱帯雨林の緑野を縦横に走る焼畑と茶色い線が走り病みつがある。この状況で人口爆発と温暖化が進む二二世紀を迎える前に

誰が誰の胃袋を養うのか」と同時に 誰と誰の胃袋を養うのか」という政治 経済の話に気象が深く複雑に絡んだ問題として問いかけている。